

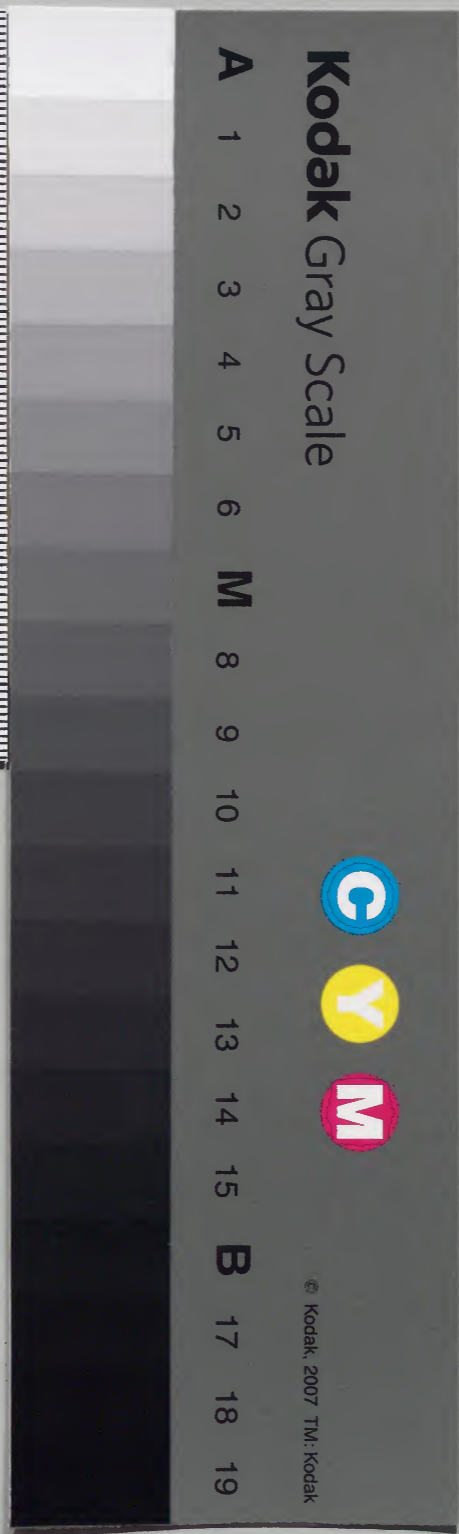
續編孝義錄料

八十五

南海道八
土佐

内閣文庫	
番號	和 34594
冊數	90(76)
函號	157 401

内閣文庫	
架	三
冊	九
號	四
類	和書



土佐國鏡草

土佐國鏡草卷之一

目錄

城下貞助妻

足姪沐如也

高岡市古集

一宮村之孝子

松田高庄屋之左集

城下林助

甲浦長十郎

甲辰村源助

城下平助

才家村乃氏

園本治七

替者氏都妻

新改村孝女

鞭村升右衛門小八

窪川村文八

江口村清七

足野八助

比良瀬浦孫化

磨斗屋六右衛門

多田村七右衛門 高田沼越原伊理部幸八

本山下勘九郎妻



土佐國鏡草卷之一

城下貞助妻孝行乃事跡

高知城下浦戸町よ志と免よ孝行のこころき女
阿り夫ら國宰源虎帯刀の家僕名々貞助とひ
々者あり貞助の妻曰くつらよ四人阿りその母齡
は七十よおまひぬるのころ六七年以來中風をう
ぬひやふしつらよ是もかあひうしつら肩や腰よはこ
はぬ出鼻寺の居はもしよりあり食する阿るひは毎日のか
よふも人よをうりたをけしれは事あり貞助の妻

新ん志強よはかたをいふもよし出せたまふよし
しむりてちと〜きりんあうり〜ひぬ〜海をぬ〜
し〜〜〜あ〜ら〜何〜〜ふ〜〜反〜は〜〜あ〜
あ〜ら〜志強〜り〜し〜強〜ぬ〜船〜ら〜母の志強をあ〜
さめ強をありおこき事事あ〜常は飲食さる
こ〜は塩梅の何まきかきまを何あり〜す〜〜ら煮か
げんのよ〜何〜を志強〜其食物の色志強を
中ま〜せ〜箸をとりにて浦ぬ何〜ら食のさ〜
ま〜さる事〜何ま〜え〜野菜菓子のだ〜ひをま
し〜あ〜て〜は〜か〜ある〜あ〜ま〜は〜か〜ま〜ら〜を〜さ〜い〜ぬ〜

幾度をも免けりぬも一人の志強よ強てあ〜し
まものあ〜は〜ぬ〜れ〜し〜自ら食せ〜と〜り〜か〜つ〜て
何〜〜ぬ人の志強よ強〜し〜味〜も〜き〜食物をお〜ぬ〜ま〜の
人の姓名と〜も〜し〜ひ〜〜し〜げを中ま〜あ〜せ〜合せし
むた〜し〜解何りて〜も〜あ〜ら〜と〜丸のゆ〜あ〜〜か〜ら〜れ〜え
一人何〜を〜ま〜あ〜き〜子よ何〜し〜ふ〜ら〜あ〜〜あ〜ら〜と〜丸
の志強よ強〜ま〜き〜このめ〜あ〜ら〜は〜孫よ何〜し〜し〜ゆ〜
何りて〜も〜た〜く〜之〜あ〜て〜度〜よ〜ま〜し〜丸〜て〜あ〜ら〜ぬ
何〜ら〜あ〜ら〜と〜丸の強を何〜し〜格を〜ぬ〜ま〜い〜
ら〜ら〜よ〜は〜か〜ぬ〜ぬ〜何〜ら〜丸の〜し〜ら〜あ〜ら〜ぬ〜

かき書物のほかにして筆をばたきしむるに
かきしむる筆をばたきしむるに
かきしむる筆をばたきしむるに
かきしむる筆をばたきしむるに
かきしむる筆をばたきしむるに
かきしむる筆をばたきしむるに
かきしむる筆をばたきしむるに
かきしむる筆をばたきしむるに
かきしむる筆をばたきしむるに
かきしむる筆をばたきしむるに

よいかしむる筆をばたきしむるに
かきしむる筆をばたきしむるに
かきしむる筆をばたきしむるに
かきしむる筆をばたきしむるに
かきしむる筆をばたきしむるに
かきしむる筆をばたきしむるに
かきしむる筆をばたきしむるに
かきしむる筆をばたきしむるに
かきしむる筆をばたきしむるに
かきしむる筆をばたきしむるに

お子をこぞとせしめしむるに明け暮れしむるに
たれしむるに明け暮れしむるに
むくゆふもすまふと涙もむせびてしむるに
されし隣家のものも其孝心を感へて町の
あはれけしむるに明け暮れしむるに
御耳に入まり来を過りてそを孝をり免させし
り享保十三年戊申の四極の末の事ありし

足摺浦五世孝行の事終

言知城下よき事ありしは足摺浦八代孝子に傳ふ

としよき有り孝父母ははくしてまゝに孝行の
まゝにえ有り助八十年と記す申風をあやこ
歩行もまゝに自由ありし事と六年以兼回し
病よかりし身志ひきぬちう記此の夫婦と
やむお通して甚くありし事と記す孝父母は代
死ておあしむるに明け暮れしむるに
るたれしむるに明け暮れしむるに
りくとも志しむるに明け暮れしむるに
あむ物ありし父母の愛をとり記す孝子に傳ふ
し事のたれしむるに明け暮れしむるに

まむしやう。私しきうや〜〜は〜〜
露をぬぐも思ふせ難あるりあ〜ま〜てやう知
頼心ある〜何るハ用何事とて外よ出れを隣あるま
の人よ何ら知したの〜てて父母の事をばせり
去年の秋海を遊江戸は免の勤何〜けり私用
あり私をば〜〜あり私〜事ありか〜〜
あ親のやま〜い〜あり私〜人〜
私をせんま〜あ〜せめてハ同僚をや〜て代よ
た〜〜と〜あ〜〜〜の〜人よ何〜〜
ま〜け〜ま〜〜ぬ〜〜〜は〜〜は親族のま

海あるもの海を遊〜〜此まあや〜あるはあ〜を
感〜おのちよ〜〜の〜目白銀をとり
何れ代を出〜ぬ親子のものよ海を〜
あ〜あ〜も〜助ハ使ぬ常よ流を流〜隣家の
あ〜〜ま〜人よ〜も海を遊〜年久〜孝心
の秘んあ海あるい〜ん〜
よ〜〜〜〜を〜〜
〜〜〜お〜ぬ〜海〜海〜
〜海〜
〜たの〜〜〜助ハ享保十四年五月

子身まうしう 孫の道かろし 孫の後の事
孫ん志強よ力を治く ぬちりき 何さうの人
以し 孫の志を感して 同一年の九月 皇極の
治かきまや 國守の御儀 爰より 何れより 孫を
賜り 侍りぬ

言 皇極市在東 奇特 半線

言 國郡 言 皇極の町 言 市志 言 皇極 言 皇極の町 言 皇極の町 言 皇極の町
時 皇極 皇極の町 皇極の町 皇極の町 皇極の町 皇極の町 皇極の町 皇極の町
やめ 皇極 皇極の町 皇極の町 皇極の町 皇極の町 皇極の町 皇極の町 皇極の町

まをぬてまうし 皇極の道かろし 孫の後の事
孫ん志強よ力を治く ぬちりき 何さうの人
以し 孫の志を感して 同一年の九月 皇極の
治かきまや 國守の御儀 爰より 何れより 孫を
賜り 侍りぬ

と能母の心をひきつけあへてあてはむべきさう
こそふ——市右衛門の兄は茂之衛門とふもの有りその
さまや徳士のあはれうて世にさうたつたまはせし
はちうきより申風をさうしてはしめをやめ
城下の西井口村よまめは妻子もあられた甚き
よりあまのあまを留あり——市右衛門兄をあまふ
事深く言圓よりいさくをさうてまう——あまは
もはねく——たよりをさうとあてはむのよ——何——を
たはねお姉——はよね何いあまを留りてあまは
たえまをさうひぬ茂之衛門より七十一よ六、何より

病い——あま——あま——をさう——市右衛門あまはせ
よあまき——い——あま——をさう——あま——あま
るをさうて井口村よ茂之衛門をむりてあまはせ
よあまき——い——あま——をさう——あま——あま
ものあま——茂之衛門をあまをい——あま——あま
道をあま——あま——あま——あま——あま——あま
そのあまのい——あま——あま——あま——あま——あま
あま——あま——あま——あま——あま——あま
とあまはせ——あま——あま——あま——あま——あま
——あま——あま——あま——あま——あま——あま

と云ふ事あり——享保己酉の九月歳暮言事あり
うはり歳暮あり——そのとりの十月は身まわらぬ夫婦
あけきうの——と思ふ事のおり後の日さしり事を移ん
お後あり聖賢の書をよむ人さくくさく——きい
希ありしやう——と世のうさく——と——一回一年の
四極は隣家の者ともけしを村のちよや明々年
の二月は——國守の沙舟より六月の初は米を
納ひて志をあらせせり

一宮村孝子の事

土佐郡土佐々一宮村は三人の孝子あり一宮の社人
江右馬といふものの子あり阿孫をよきとふ妹をよ
といふ者を江右といふ江右馬といふをよきとふとらぬ
其の書より七千はちくそのうし中風をや四年以
身まわらぬと志の事江右といふ自由ありき三人の子
つれとよききて孝行をほくせしとその阿らよ
たよき——侍りぬ婦のまもるは四十は五阿孫を久
——とめとありておはりたひ——縁成きき
しきよ——とむむ人阿れと老母の病甚——たの
みまわらぬ人あり——衣食あるは福ありたきくこのはら

しつらわしはくしつれをばかつかんとおぼしむるをよめて
きつしねきつ書海吉とていふよしをいひしはあつて
道をほくらせり妹の徳もあつて人妻とありし縁
あつて一人のむしめあまんをほねて夫の家を出おや子
あつて一宮の社のしせとありかきしをいひし清むる
るをきしむるよはうとてあはれをたておめね
る糸の糸跡をまつて母の書とて一編ん糸跡はほり
ておこきするりあつて一編吉よし三十五集あつて
やはきしむる時人なきあはれとて目をおくらり
或時と徳士の家はほりて僕従とありきよの

昔方をくさぬきしとておやほり何よまたふ
の道かきしあつて一編吉よしほりて後卒と
ありしとあつていふよはうをきして母をきしり
母の病日久しきとあつて一編あきとてきし
いふよはうとていふしはあつていふとて三人
の子もあつてあつていふておよきしとてあつて
衣類食お心乃すにとも乃くねきしとていふと
なつてその海知なるをいふとて一編村乃思子
せりとの平春を称みせはるなり一編保十四年
己酉乃十二月このよし一編國吉きしとていふ

明るき月よこしけなく夢を下りぬ

松田の乃彦屋の孝行の事跡

あはれ松田の里長は孝行の父を新六とて代り
け里の長たり新六をやく所一は孝行の父を
めをつり人となりたやに一つは兄弟はむは
すく慈恵ふりそのはまきと病を治し
あひぬく病く事能く治す孝行の父を
おしり孝行の父のまよひを治す孝行の父を
大小の事らひあり孝行の父のまよひを治す

をありぬ國用の布は経は者あり母の
けをありぬ病のしりありを治す
とおろりり孝行の父のまよひを治す
よきことありけ里の里長は孝行の父を
田代人もしたるありぬ病のしりあり
は孝行の父のまよひを治す
き家財妻子のより病を治す
ありて人は孝行の父のまよひを治す
のいしりありを治す
まよひを治す

村やぐと感銘を感ずること久しきれを 國の守
より巡見の役人を東西へきりあひしむけ村よ
役人事ぬる時里の民ともさな事つり孝友の有り處
を中出(き)しむをさな馬(つ)使(す)てしる(は)母(は)片
之(中)妹(を)お(も)つ(る)事(は)人(の)名(あり)海(し)よ
君(よ)な(ま)連(さ)る(事)あ(ら)ん(や)と(か)く(割)て(き)き(と)
その後(く)り(て)城(下)よ(ま)え(上)り(命)を(下)し(て)
と(し)極(め)多(く)時(を)ほ(て)地(下)人(とも)事(實)を(記)
し(て)浦(の)片(を)よ(り) 邦(君)侯(の)こ(と)き(き)
し(め)し(米)を(き)き(れ)雁(長)み(し)る(よ)京(保)十(六年)

庚戌八月の事あり

城下林助孝行の事跡

高知城下七曲なる人町に林助といふもの有り生れ
はきつし心ふる心さぬ家よし孝行の志い
とけあき時より人よきられ事たけしむくふじ
ま(く)母(よ)お(う)れ(ひ)より(父)と(も)ま(ま)り(父)を(伊)助
と(り)お(お)甚(ま)す(所)こ(と)よ(さ)こ(ま)ぬ(る)者(を)さ(き)
も(や)父(子)と(も)ま(ま)り(備)し(て)世(渡)る(日)を(ま)り(あ)七
年(あ)り(や)父(り)より(ひ)六(年)を(さ)ぬ(れ)を(阿)る(日)林(助)ま

ハルハ父人ノ事ハカク憂ヒテ其ノ所ニ在リテ
おもひも多クサレト今ヨリ後ニ生ラレハ
其ノいとろを思ヒテ父人ハヤシク老を
休めらるヘクサレ自ラ事ヲ断リテ
父ノ苦勞ヲ受けモ父ノ外ヨリ用事ヲ受け
クハ申ラぬトキ付テ其ノ事ハ
コトヲ受け父ヲ養ヒテ外ハ出レテ父ノ終日
ノ食物ヲコトシテ其ノ人ノ事ヲ
おもひ父病ハカクサレ林助進キ
の事ハ其ノ事ハカクサレ出テ父

おもひも多クサレト今ヨリ後ニ生ラレハ
其ノいとろを思ヒテ父人ハヤシク老を
休めらるヘクサレ自ラ事ヲ断リテ
父ノ苦勞ヲ受けモ父ノ外ヨリ用事ヲ受け
クハ申ラぬトキ付テ其ノ事ハ
コトヲ受け父ヲ養ヒテ外ハ出レテ父ノ終日
ノ食物ヲコトシテ其ノ人ノ事ヲ
おもひ父病ハカクサレ林助進キ
の事ハ其ノ事ハカクサレ出テ父

父よりひそし七十一の年あり卒後のやまひも月をいへ
日はすししとあやましとありぬ林助りきまふ
くう事ひてあるはあかひ時ふりれたおとをれ月
とあるまふさうむさうあつとてわづれある年一圓とし
さしよとあつとてまてやま後ふきをたきとの
うれあるおとしやま一隣家のものともわづれ
とてありし米も目あときとてきさつげよき
のせりうくまをぬてのまつとさいとやまをと鶉の夜
もあよすといふと鶉夕のりわりとたえまうちあれ
ともおれさくさつゆよけきき父の病をのこる

まひくまのりとうやこの外とありし縁後あるは
くまよともおひりう一京保十六年辛亥の
春同一町の組員ある町人ともとのとありし
あきる老事ふ書を書けし福て町もよ中はさ
しとの事を書て 邦君の御年よ入せり
夏六月よ法隆衣みの米を賜りりゆりし

甲浦^{かんのうら}長十郎^{ちようじやう}孝行の事跡

あは那^{あな}浅眉^{あさまゆ}の庄甲浦よ長十郎といふものあり
其名の漢人の組員あり生れ時きおや兄弟の

交う道何ぞとて慈悲の心婦人一族とむす
化人としたくも世渡りの心を勤まらば軽重は
以自身苦勞を以て一人の心をけをせり浦人
ともうと記せしむるも其特なるものあり
はまてその仕るべきは心あらひていはれあはせ
さるるか一父を兵を命とすふをかくりぬ
も十命母ははめて孝心ふくむの心は
この法にめ給々の法にまて孝心まて
聖の教よりあるに用何うて外はゆきお受て
ゆるしを授めず母の心あり入りてあやしやを

いとと記せざるをんて退ぬあはれのみ大いよ
らも母よりの心高買の心をまて母の命の
よまて心露持むる事あり母をうぬふ時
途の送る人よまてくれうかいつと流るその後年
忌のまたりはりのいよまてまてまてまて
事あり隣家のものともあるため一はか
りあひぬも十命り婦むる市在るあり妹む
平八眼ををる事ひめ一はかあり市艇
一艘をまてまてまてまてまて一はかあり
丁亥十月四日の大地震は大地あり民家のこも

流きうせぬ。時平ハハ船とたしよひてあゝあぬり
うねをうまひて平ハハ妻ハ心風の病をうけしをちか
き廢人となりぬ長十郎市右衛門平ハハあ家をも
こゝろおれしよ家をうすて居候せしめ又平ハハ女
りきあよ阿ハキヨ市艇を作りてあゝさかぬまじ
と妹のやまひ愈まてしち長十郎ううまじしよ
ぬり長十郎ういしよは徳ハ助三太郎しよふま
阿ハ徳ハ助ハハけあき時ハ父ハおくれしち太郎と
亥のしよの妻ハ阿ハ家法なりまじしよ米を浦の
浜かきよりり徳ハ長十郎あ家をあゝしよ

事阿ぬ妹のしよ三太郎う信長をまじしよのひ
きしぬまじしよお族の百わしぬまじしよ
よしあしよまじしよ家内をまじしよふしよ
中阿ぬ弟と友しよの魚しよあきしよしよ
らひ亥のしよの妻より後々母の孫ハハはは
兵部将ハハあしよしよあはる實ハは若の及を盡しし
ぬ人本石ハハあしよしよ浦中一同ハは歎けせしよ
しよしよ臨終かたりあき事母の人の子きり中
まじしよの鏡しよしよしよ享保十六年辛亥の暮
阿ハキヨの役人よりしよしよ寛永永永年戌子のあしよ

り隣家の老ともそ那の泣きもよ中へし記録のひ
之は流書して中へ六月中此 邦君の流書
笑として事を始むるをそれを見送るなりとて

甲辰村源助孝行の事跡

吾川那仲村々甲辰村は源助とよふなりき農人
有り父を亡たすといひ兄を助助とよふ人ともよ
まうなり源助とよひき母は泣きて孝を泣く
家まうとよれと幸は田畠をたしし事まうとい
塩をたれて志流ありとてまうとてまうとて

七人朝夕のりありけりふきえとあれとも源助
まうとよめめる也あり母は泣く百は道に
まうとよめよまうとよめ源助とよふあり
して飲みの食いのよ事実を泣くふ潔の衣
類ありとておまうとよい流ぬ出れたまうと
うりていよみえつと泣くとよも母のよひ
うらまきぬいえ自身の泣くも目をさうと
たのまきさるありとて涙をありしぬるは
れあるとよありまうとよまうとよ
いふありあり一兄の子甚は家を流しとよまうと

して母を孝りんといふと源助らけりて甚だしく
やむるをほめて志はあつてひぬさぬえ孝心のやん
事あつて何れもこのうたゝ一家のやうに志し
ふく隣家のものともむらよなまともより自己の汝義
いふうもとおこすもさすの貞おとこなりあつて一度
のせめをうげきとあつてありの何れも実やうふを
あつてある事しれは事の自然誠は事よもとおよひ
う——享保十六年辛亥六月右の何れも——
君よよきことん徳慶美徳のこころり——めりぬ

城下工匠平助父よたら孫達も徳

工匠平助とうよもの城下のうたぬえ父を茂徳と
いふ茂徳は徳のさだ本匠のうたぬえをもつて渡辺
何某のあつてはく徳をう——つ寶永六年己丑は
くをやめて友歴は新化のまの身まきを望みし
る津をわきりていふ徳をぬらば必強波よおもむき
日夜事業おこすう——きたよりをもちめて金銀
をぬらかり妻子を孝りん徳のかつ平助はいとけ
あつて母といふとよ國よなれまかりし後茂徳ら
身のいふうと徳をぬらり——はあつてひとりのかきり

を過れどもかき移りていと友願よ告るよと何れも
もとより御心の志何れとも御心の用意さくありま
すふるう存んとすれども朝夕の煙きつる魚きてそ
もあー御心よ御心よ御心よ御心よ御心よ御心よ
ひきよーと御心よ御心よ御心よ御心よ御心よ御心よ
て御心よ御心よ御心よ御心よ御心よ御心よ御心よ
平助いしけあて夜合の母を告たよりあく人の下
僕とあり母子とありいとありいとありいとありいと
りりやーとありいとありいとありいとありいとありいと
豆ねたくとありいとありいとありいとありいとありいと

辛酉年やと十とせの暮林を魚てやうやとおの
りやとありいとありいとありいとありいとありいとありいと
ひあ徳の思ひを告せりさねを平助らすれはき
て孝の志何れも父をゆりーとおありいとありいと
りあり八九年お幸よ師とありいとありいとありいとありいと
り父の生を告せりいとありいとありいとありいとありいとありいと
よ御心よ御心よ御心よ御心よ御心よ御心よ御心よ御心よ
もーとありいとありいとありいとありいとありいとありいとありいと
に心よ御心よ御心よ御心よ御心よ御心よ御心よ御心よ御心よ
御心よ御心よ御心よ御心よ御心よ御心よ御心よ御心よ御心よ

—よやぢれとてありし—とて—とて—とて—とて—とて—とて—
まき松ありてその羽の—海國—はれとて
心の田の—とて—とて—とて—とて—とて—
後河とて師の許をたぬれしとてかぢおの
随意ある時をくれ—とておもひあかすの本道と
しをたへて再度にやゆき法敏經学の清用
をうけし—國主の法靈形はありて外は出れを
父を尋るのち後—とて—とて—とて—とて—
浪のやもやあり—とて—とて—とて—とて—
阿るははれとてあらぬ人よ—とて—とて—とて—

—とて—とて—とて—とて—とて—とて—
はれとて—とて—とて—とて—とて—とて—
り—とて—とて—とて—とて—とて—とて—
こ—鬼神の冥助よりありぬるよや—とて—とて—
て父のかりのやとてをたぬし—とて—とて—とて—
を阿るや—とて—とて—とて—とて—とて—
ぬれとて—とて—とて—とて—とて—とて—
い—とて—とて—とて—とて—とて—とて—
り知名を中—とて—とて—とて—とて—とて—

き後随彦のちみたまきりもいふ事と云ふも
おろりるをかくて平助父の年月のせりしり
の身もききをとくえきをうききききの根をくえてあ
あさあさいこようわぬまほよひ何彼の道門よら
あし福とけりうきききききの淵源かききよらききき
—たきいあよたらぬて車の輪きききよらききき
負片息山の飢人のいじ—ききききききききききき
はれあき命の消やぬをかりありたけをききき
—事—指をおくおあきききききききききききき
おら—享保十六年辛亥より建永六巳丑より

ありはれをいじきききききききききききききききき
—平後平助海國の初もちりありぬたきき
ぬらききき—父よらきききききききききききき
君の事ハゆるきききききききききききききききき
ぬきききの母のあはけきききききききききききき
ききききききききききききききききききききき
ききききききききききききききききききききき
よ國よらききききききききききききききききき
ぬらききききききききききききききききききき
のけききききききききききききききききききき

國の長臣よ中一重き沙汰ありて平助よ命——
父を獲——てあはれ——め秋九月死の慘を
をたさるれ 國皇の沙年よいれたまふ——に
か——く平助よ忠を効ひて孝心を盡——
むひ幾化つ亡命の罪をゆる——て妻子とともよ
あはれ——めさうさうも平助らひとりのや——
きよのあれとも人よまられてたしくい帝ある孝
行よ——りて天のきまけよあひ及あき 君の
忠を思ふやうぬりぬるり主君——宗朝の朱壽昌
といふ人いふけあき時——とらき——母をとら——

あて居れば——おきよ松江の女國を出て江戸よ
まある父よ居ればいぬると同——日の物語といふ
魚——す——てや父をまきとほげ子をう——あふ大悪
人の治政及のまきとけとある國のりれをまき
清め侍り——と父母よにうりて久——き豊中の清
水を再度ともし汲志むる本を又また平助う人
の及をたさげきつるのまか——いききうほをりよ
——の物よ君よ清くてもあある臣下をりともむる
いおやよ清くても孝ある人の家よ何——といふ誠を
ふりか善をもて死て美をい——とをこ——

罪を以てふるの沙仁也の法をうつさくとも手助り
一子の後忌よはきて大よ光を海を後くともぬ
君の沙徳風めてうくおれえ侍りぬ

すまぬ村の氏 上よはして義をまよさるる跡

幡多郡^{あもやま}下山^{たげ}のすまぬ村は南國の西北のさうじぬは
て渡河^{わたがわ}のあとの地ありおぬ敷五十六軒農人細工人
あま一人あらずさうじぬをたうり風俗あはくは
てさうじぬの氏の上もさうじぬのよおちくとも
すさうじぬの事ハ後をたうりもぬさうじぬ

海ありぬたきともかあさきともよ力を何ぞ回
島の真田山林のうらよのあはく商人運之の海あり
まして 君よはまもあはく後人のせをたうりさ
まもいも收納の目録よりさきよいさあこ出さ
一人もおこきふもあはくはく家あはくはくは
けの法用あはくはくを田代をむくまをさくまあり
の母渡あま百氏まもいあむもあはく一回よ命よ
あはくさうじぬかき海切あま事ハ化の村ハ化より
なるよさきさくはくはくはくはくはくはくはくはく
をこのまもを農化の目をさをおぬたうりよせま村の中

よおしひらけあきと重き病をうけ子といひけあ
てあをほしむまき松の人おれえいほきも何所
まり様して病人の護母のいふもむ用の勤め
を介よりたまきけさうもさよたけあき
極よ心をほけてかいらうし病をまう治せしめ
何らあきあき子の成長を待たせさせあをたや
まのうねをまぬねしむまきいふもあうた
あはれのみのもいひうえの事よしけあより
治せ今とありて出るものあり享保十六年辛
亥の暮下山々の大庄屋毎國普院年久し

アサセしり実を彼村の長磯と逢したし
つふまよ 君上よまよ一保よまよせ

邦君まきしりめされ兼四指と依をまあ村よま
され庄屋地下人よ鷹夜貴の命を下し多ひぬ
おあしりしりのお十月之旬のりあうまほり
おしれ末のせよありて人の心うまう道よたうひ
節をとりしりあうりのもあうて城下の法
政道何きうらうよ義理たしきまよまみて神の及
びしりれ教をみるま極る人よけのまよまよ
よらあひぬるいああるたはああ村りまああか

その山里より目をつけられたる者ありのうら
うらきを及んで耳より正しき身持の者一をま
りてとていふもあまの清く妙なるより生れは
人の及を越えあひやあす年月はまき一を
何れに
君の清恩をあはれく世にまきと
國に我らとての後ともあす海くたあ一あり目出
度物傳とらふ一

國本治七孝行の事跡

國本治七孝行の事跡の事跡知城下の生れあり九年

幼少は土佐郡新倉あきくらの庄枝々村より生れ居たり
人となり正まよかしくまことありをやく父はおく
き母ともいふ家まゝに生れまらしき醫術を
世渡るいふあまの世を母のよあひ八十をこえ心身
ともよよかり世の上重き病はかりておきふし
用事一のなをひも自由あるを治せよをひき孫
をわしたまうてみたり子ををさるむうら
こめる食物をハ祢ひのまよよとのすめぬた
あしと一何れ一編のこのりあり村中飢はおよ
時節はあひ業を何れし人の恩をむくゆるま

たよりかりれたを存教うけり物をうせたらひて茶
肆よりけくのひえら物々のまうけとありて孝
行の志いよーおと教うけり母の側を
たなれすおととて大に徳をたてて
き時ち母の志をたてよ入まてあゝあゝ
衣食ありのりねーをけひまきとあゝ
ひるむ色あり一ありて外は出外事あり隣
家の人も母の足抱へをたのむを先よりの用ひを
りねえおのまう者よりうりありと外はるる
母もおのりりねる孝行をよけあひ涙よむせひ

て子ありとも似合ーかぬ昔方をうけぬる事
のりねるいねるをあげきーあり治せよひ
四十をまきし妻ももたきお族のたをけと
かりねる治せよやうー一腰刀の金具をた
りーあり志願する程ありぬ村の長何某けあり
さぬをありねよおと心 國守より飢人よトし
物よまきひの茶をうけきーあんとまむ
事治七かーいあてうけり村中孝行の
徳あると我心の堅固あるよ感後ーて享保
十八年癸丑の某けーをやうのてー茶を

ききしれ 藤原 貴

贅者 氏都り 妻 深切ある事跡

言知城下の西井[#]村の町は氏都りより産良阿婆
よしひ七十はあまり妻も字をさへぬすりし氏都
りとおひて喜曲の藝はしあへる屋は八の末をえて
朝夕の燵をとりあり其の妻はははていさくもお
孫持りあしをばししあへるあへるあへるあへる
くくよやといふて女の身も子をばしあへるあへる
ま阿婆時とて葉末成りぬりて合ひをとりし自身

い何きものををくくひまよと味よき合をさすめて
よ孫あまししとてあせり 氏都 田ごとくに城下よ
ゆりり朝よハ乃のあうをすておくりよをりてあへる
め善よハ福を孫節よあちむてあ吾をよひたをけ
てよ孫こちしむは孫ししあへるはくの切あるあよ
隣家のものた何りれよおもひてや享保十八年癸
丑の暮け何しすしを村のあよはけ孫よ氏都りこと
しぬ人よ下しあふまきしひのあをうししあへる
るをせし上 邦君あししあへるあへるあへる
貴の命保のしし

新改村の女孝行の事跡

長岡郡^{ちのち}植田^{うゑた}の^{えんぐい}新改の村は母は泣いて孝行ある
女有り名を^い秘^いと^いふ母をばなを^いこ^いつ^いを^いや^い
父はあ^いりて母を^いねり^いせ^いれ^いは^いき^いす^いく^いて^い孝
行よ^いく^いむ^いや^いる^いあり^いけ^いは^い八十^いは^い九十^いの^い母^い
泣いて^い秘^い人^い志^いは^いを^いこ^いく^いや^いあり^い世^い渡^いる^い世^いの^いさ
し^いま^いの^いこ^いと^いあ^いく^いや^いし^いれ^いと^い露^いを^いあり^いと^い母
の^い心^いは^い秘^いむ^いく^いも^い合^い物^い衣^い類^いの^いい^いと^いあ^いる^い力^いは^い懸^いく^いて
涙^いく^いと^いあ^いく^いき^いふ^いも^い足^いえ^いと^い隣^いを^いぬ^いる^い風^いを^いあ^いと

こ^いう^いし^いぬ^い時^いは^い自^い身^い母^いを^いか^いき^いお^いひ^いて^い秘^いの^い心^い
ゆ^いき^い湯^いを^いこ^いひ^いて^い母^いは^い泣^いひ^いせ^いあ^いく^いむ^いし^いら^いい^い
を^い志^いと^い涙^いき^い母^いの^いい^いげ^いあ^いき^い子^いを^いう^いら^いう^いせ^いら^いう^いこ^い
し^いそ^い原^い切^いの^い泣^いく^いを^いえ^いる^い人^いこ^いう^いは^いあ^い特^いある^いる^いは^いお
も^いひ^いて^い建^い河^いく^い難^い義^いは^いお^いよ^いお^い時^いを^いぬ^いく^いし^いら^いう^い
泣^いく^いの^い心^いを^いけ^いあり^いて^い昔^いある^いゆ^いあ^いく^いあ^いり^いさ^い
ま^いし^い秘^いを^い妻^いは^いせん^いと^いい^いふ^い人^いあ^いれ^いも^い老^い母^いを^いた^いの^い
心^いを^いか^いた^いあ^いく^いと^いく^いま^いし^いら^いう^い秘^いの^い後^い母^いを^い
よ^いむ^いく^いと^いい^いふ^い人^いあ^いれ^いも^い人^いの^い心^いを^いか^いく^いし^いら^いう^い
史^いの^い志^いを^いあ^いり^いく^いく^い母^い泣^いく^いの^い心^いを^いか^いく^いし^いら^いう^い

いひて家をもたの心さうよふ——享保十八年癸丑
の暮村長何り——隣家の者くくく孫守て
俗のこくく中との弟を弔ひて慶幸せしめぬ

鞭村^{ぢら}神在馬小八孝行の事跡

幡多郡入野^{いりの}鞭村の農人長左馬とうふ者の子
二人何り兄を神在馬とうふ中を小八とうふ二人も
は親は能治^{のり}兄平の旨むつす——神在馬の父うじ
さを継てる醫を業とて——村は何り熱心
の子おぬを父を苦うんと親も小八夫婦神在馬

りまら——ぢのうく醫の目さハ常よ有よ
のありうききを何れいきうり也——さう——は
けて父を家屋よをあんも父と小八もとも有る
をあ——とせり神在馬父と中の志よきうん事を
たうり孫ふよませぬれも有る形も時をたよ
父の——よりてあををとい度ぢの妻をき——
酒をきあ何れ父を我屋よむくてあきあを言
母ゆをぢの——を中守せ何れ時をぢのす父
ぢよ出ぬ常よ妻よ中守せて自身有よをうす時
父の来り何れぢのうり何れをよまうとてあ——也

孝行のふりなれとてあはれとて孝行はし
てあはれとて孝行のふりなれとてあはれとて孝行はし
よ父よかりて農業をほよめひくの田代ゆたかあり
まこととて父兄よほりてまこととて孝行はし
のみあり婦ありて人は嫁一子二人をうまよお
くれ子もいといけあはれとて孝行はし
も子も小八よ孝行れあはれとて孝行はし
り父のよひ九十九よあはれとて孝行はし
をうまよたきけておこきとて孝行はし
道をほりて孝行はし

をまよめ自あはれとて孝行はし
あはれとて孝行はし
まよハ菊をきりてうり酒のわらとて孝行はし
菜葉子のねまて朝のぶとて孝行はし
あはれとて孝行はし
父の心よえきとて孝行はし
を知しめとて父のよほりて孝行はし
小八の孝行はしとて孝行はし
く孝行はしとて孝行はし
き志とて孝行はし

享保十八年癸丑の春海のこゝろ
君上よきこゝろ八月申比鷹養の糸を繰り

窪川村文八孝行の事跡

窪川村文八孝行の事跡
窪川村仁井田比屋窪川村の町は文八とふとの町
若き時ち當村のぬい玉の老臣林氏よりかへて如
き勤をせり後ち如く之をやめ行備志化をせ後
あゝ家もくれてまゝに老母よりかへて孝行
の志何れにわ年およ母より中風をやめは志心
おきふに心よき母を文八夫婦よりかへりて終り

たまげ及冬にあつひ朝夕の泣く及よかあけり泣
くありて外よりゆけをせぬ母の傍をたふれ
中付るまゝよきこゝろひぬ村の祭りとある時ち夫婦
るに母をおひ泣く人の泣く泣く泣く泣く泣く泣く
にまゝにめ夫婦あきまるとたふす物もよし
母を有ひ引回すこの泣く泣く泣く泣く泣く泣く泣く
にむ文八の泣く泣く泣く泣く泣く泣く泣く泣く泣く
に夫婦二人の子にうきよおしふちあねも母の
る食物ちりすよ細くあてては泣く泣く泣く泣く泣く
いふに泣く泣く泣く泣く泣く泣く泣く泣く泣く泣く泣く

か——隣家のものか、其の孝を成——享保十八年癸
丑の夏、申寅を記——俗よまをせし、秋八月、糸を
きり、れ、鷹、黄——あり

江戸村流七孝行の事跡

言知、城下北、江口村、流七、と、ふ、もの、あり、と、あり、
也——、ち、り、と、見、て、昔、の、あ、山、林、の、流、を、此、下、よ
役、吏、と、あり、て、流、七、人、か、り、き、ふ、り、は、津、阿、と、能
お、や、よ、津、ふ、父、を、は、や、り、お、ま、り、む、り、母、と、似、り、母
の、よ、り、ひ、せ、十、よ、ち、り、と、重、き、痛、を、う、け、一、種、ひ、き、は、り

よ、是、志、ひ、ま、て、起、婦——、心、は、何、や、る、事、廿、餘、年、よ、か
り、ぬ、流、七、を、こ、こ、と、昔、の、道、を、流、七——、流、用、の、あ、ら
か、り、り、哉、さ、り、と、心、よ、切、あ、り、極、よ、流、七、友、の、阿、居、中、日、ハ
母、よ、湯、を、ひ、き、座、の、何、り、れ、本、陰、を、志、き、不、を、せ、り、
ち、り、と、む、り、流、七、を、志、き、阿、居、を、よ、ま、て、涼、中、志、め
園、を、り、つ、て、蚊、を、追、ひ、蠅、を、と、り、ひ、あ、り、さ、む、冬、の、寒、
き、あ、り、流、七——、流、七、を、阿、り、め、母、の、か、り、り、よ、ふ、り、て
あ、き、ら、る、を、う、り、ひ、躬、ハ、を、り、起、て、火、を、た、き、母、を
爐、の、何、り、よ、り、め、命、の、を、阿、り、り、よ、り、と、せ、り、
め、命、の、を、忘、ま、り、む、流、七——、躬、ハ、母、よ、夜、に

をきき帯をむきむ髪を指りつり念もろも笑をとり
てくぬゆりぬ枝のわり用事とのる時たきく
かいわくきくこをきあき子を母のとり阿波ふうこ
らー衣類のりうれをききき阿波やうの事らひき
もあく何よよき人よたのます自身法と免ていひ
昔むああー海用阿りて出候時ら合事阿ていひ
を福んこ海は隣家阿たのこ枝のうへ海をむきけりて
人よりー海用よてきき阿りあひひら阿いひをき
も母の足飛へをねぬ渡せよい三平をるぬれを指
家のものともお趣の書をむくよーこきあぬれ

と渡せうけりてとーそくハや阿れまーく渡り
ぬぬるくー朝夕の煙さく層ー志書をもち子
と阿くも家累多く母の苦むあーくわけあんり
せうぬおといひて用を阿るひら父の今日よあ
ねえ母あその仙事おこきりあーこりおこあひぬ隣
家のものかー孝事の親切ある事を重くー見お
よむ感称の阿り阿るに事實を記録ーて
享保十八年参進の友村のあよー阿のこー中
之秋八月よ米を多ひて産後考せー家

足輕八助孝行乃事跡

足輕八助とうふとの香夏郡板波^ヤ御の甘きとて
足輕源流^{ちっおっ}の吉子あり源流^{ちっおっ}の長尾郡池村^{いけ}よき
ゆり八助父よかり江戸よゆきあるゆり必月を継承
して勤るゆり八助よおよしとてしつかりおん事とて
人ともありおやよ孝を法^しく一見事よむ法^しく
孝父母よ法^しくもゆり實のおやのこゝろ家の妹を
しつかりしむるまことの妹を志^しきとてはこゝろから
源流^{ちっおっ}の法^しは酒をよのめり八助城下よ行^しこゝろ
竹筒を懐^しよたらき酒をもとめてわがうれを

まゝ免てたのしよぬ又およま^しのこゝろの
あしとの二人の妹よ何^しては志^しきとてゆり源流^{ちっおっ}
目^しのりの子果^しにゆりもあきとてあるよ母^しの心は
心のよし^し止^し八助^しゆり妹の志^しは法^しくを
き^しおよふ^して用^し此^しのこゝろ一^しかぬよ
ゆりぬ^しを志^しきとてや^しは和^しらき何^しぶ^しは
ゆり孝^しのな^しまれを法^しくし^しむるの心^し
ふ^しるよお^し原^しのゆ^しら^し族^しのゆ^しら^し志^しをた^し
い^しん^しお^しよし^し一^し扱^しを^しき^して^し数^し日^しと^しす^し
るよ^し酒^しを^しか^しひ^して^し父^しよ^しお^しる^し事^し城^し下^しよ^し

むくよひりー何るハ江戸勤のあさりて東武よお
とむくよもたりーほま此酒あき人よ何れくお丹
父よ酒をおきのせぬ玉の後よ何れひのまよはく
のり母と二人の妹をむきまもとあれよおれやあし
てあだのほとあや朝夕父母のあきや石をうかひ
友冬のほく何れはけてもまあまあうまよふこ
とるー凡勤仕のいと備よハ春化よ力を入ぬれえ
麻麦化よまきれてみのおりまぬえあや八助りか
まくれたる身持よ隣家ハやよやおよ一村の老
心あるもあはれあきまもひりよおもひはきぬるの

り深源氏夫婦も八助りまあまのほくをふくほひ時
ーも享保十八年癸丑の夏八助り孝行の何れま備
を記して是煙のまよまーけ後八助り勤万一
あやまり何れまもまあーかハ孝行の褒賞よ
思ふ何れらまゆゆーまうりまとまりあくまおぬ
同僚の面もまおのー連累一封の書を志たため
おきようほくまぬおままも人こまのまをたはれ
とまおまよまうせて 邦君の法年よこれまり
大よ盛賞ーまお同ーまハ八月初よ八助り捨を
まあられ代おまあーまうりぬまぬえまをまけ

たる父母よまらぬ実やうあるらむれあるよすしや
若父母へりくまめあるはくちたふひまきくあきた
免し一珠よま道の人の鏡とありゆりぬ

清原瀬浦孫化孝行の事跡

吾川郡仲村々清原瀬浦の河き人よ孫化と
いふ者有り父を孫内といふ家内ふ人有り父のし
九十よちりく母も七十年よおよひぬ孫化二人のおも
はくまきくまきて孝あり父のよりひかひまき心せし
く時とくく家内此ものをせえたるころあまげあ

ひらめるまき家を出せしと孫化まきくしもさうひお
こまらすお量渡せをたけまことをおしりて若
へり父老よ酒をきりあり孫作日ごとよまのて
まきめまらしきりゆよかきるといふことありかき孫
とまらぬある心をく右親族隣をぬともやばらまむは
ましかりまきくまらぬはまきの厚く実あるをかりぬ
し享保十八年癸丑の夏のはまき浦のはまき孫人
はまきとけけ越をはまきにやまき八月癸亥
しあしり

通町屋牛屋六三傳新談をめぐむ事跡

高知城下通町の商人屋牛屋六三傳と云ふ者吾川
郡仲村に流る瀬浦のうまれよく早く父はおくれ
伯父のしやと云傳り若子とあり母を流けりたか
り此妹有りて流る瀬浦漢人六三傳の妻と云なり
六三傳の家内はつうよ四人をあり二人の子有りし
ひとりハ身まうりぬ家すつしきさるき一妹あり
業あれ化もみのしきさるより米の阿はひ日すし
くありてうよおまうり六三傳はしすしをすま
をぬるすいと秘んた流あり毎に食物を流けけ又

六三傳一人の子をよひとりて屋一あり妹をとり
よ家屋よま秘んたをこし六三傳の苦勞をすま
と喜れとも妹うけつしを主婦の情とよ流すひの
目出度もうまひのうあしきをもともありてか
かたといひうゑて死するともしを又すてくを
義阿さんやといひてまうりれを浦に流うてお
歎一享保十八年癸丑の夏六三傳と六三傳の妻の
事跡を記して浦の流うさるうつたへか
あ 邦君きこつしめ一秋八月六三傳は流る
初をたすし六三傳の妻よりをとりて流りぬ

島村七章七馬の御田所御取御事奉八あとの類

飢民をさくふ事跡

享保十七年壬子此秋西家の稲よむ一付て此と
大より十は八九ら志つと秋すすかれ野のま
きのこ〜〜かしこ牛馬の草も用よたをけ
虫ハ世の若の稲虫のた〜ひよ〜何〜て害をさ
おひき〜〜〜〜おひき〜〜おひき〜〜おひき
りよみら〜〜〜此心ある〜〜されたる國の東西の村
置ら急よおひき〜十八年の暮より〜

邦君命を下〜〜凶年のま〜ひと〜て飢人を
かり厚よ何らめまをま〜又ら稲〜ひよ〜りて粟米
をゆ〜〜ま〜れ作りぬけ時〜志何る士農工商
家此有まよ志〜〜金派米沙を〜〜人
ま〜ひめ〜法仁政此ま〜〜る貴物の志お
〜救百人よお〜〜を今浦河此法〜〜り
これを記〜〜一巻此書と〜〜 邦君此
覽よ備〜〜よ 君たよ感〜〜ひ同
の此法役厚友へのもの〜〜れ法料理或
多目あ〜〜〜〜〜應称の等〜〜り

まことしに難有は政ありと學の終るとして阿久あまより
りり申よもまことしにて深切ある者ある阿りしを
かこしけあくと 邦君より信よ命しあひ其の
まことしよまことしより信を接抄し記する處きしより
作をうり阿り其の記録や一修面の詳略よ志しよ
其のまことしを信しよ信りぬ

土佐郡鴨部村よ高田村七帝古馬 高田新島次伊賀
羽幸八とふまの阿り七帝古馬と高田村のうまれよ
歸士あり深魚次と長岡羽比江村のまれよと歸士
高田新島次馬り高田族あり 近年高田村よ事りま免

里幸八の城下のうまれよと其の老臣深魚次系の
家よ信り近年信り高田信り壬子此をより鴨部
村の氏とも飢饉よおよよのまことし阿りしは深魚次
人よりまことしよ心を信けまことし信りのまことしを
あしめよあし村の長深魚次とよまことしの七帝古馬
阿ひて地下のまことしひのり心をまことし信りやと
深魚次よ七帝古馬のまことしやよ同意して幸八深魚次
と志の阿り信りまことし力のおよふ信り村中の飢人
をまことし信りしやとたしようけひしはれより
三人兼を出しはれしよまことし阿りしはれしは三人

の親族は其の事をもあはれよあらひ志を起し
大よ地下介補の益とあはれり子のあまより其の妻
妻よあるまじく三人のよきかゝる米三拾石余同
心の人より出たも縁とり何れを妻はよあるまじくを
ふ心とけ農業のよくをりまじくをえらひきぬ
志のよあしを其の村よひくの田代何れよ其の國
用とて一に切よ人をやとひ其の何れひ田代を
町よ米半定うて出たも有りしよ其の善より
農人ともまじくしてはう事よおよひし村長より
お話をとけさしめの外よ田代一町よ米半は

すしきせり三人の外ひく地のかしともしは事をも
同んして地下のあはれをゆり又其の地下一回
の定式新徳とおしあての困窮友おこさるる人と
しを三人のものに所ひえをし其の何れひく
年此はありおかりしとけぬ故て鴨那村の飢人
四百拾餘人よおよひしを三人のよのれきとけ
よより 邦君の法まじひ米法賣米の縁ひ
あし一人を中出たものあり申よと法無はらふよ
白紙を出し地下にむとて又おや里此は其の國系
其村のひく地よまある窮人よしをくを出して

志をけりしれみりしとやけしよ城下今浦よ人よさ
ききりてまを心をも付前のまを心とあれふもの
城下通所商人濱屋惣助 香多郡 香多中村字池内と市右衛門同郡
山田村忠人芳右衛門 土佐郡 藤中村忠人文助 香多郡 赤尾浦商人
人香多屋森八郎りたし

邦君此法をくひの命の由

さるあよ志をけりしとやけしよ城下今浦よ人よさ

志をけりしとやけしよ城下今浦よ人よさ
志をけりしとやけしよ城下今浦よ人よさ
志をけりしとやけしよ城下今浦よ人よさ

志をけりしとやけしよ城下今浦よ人よさ

志をけりしとやけしよ城下今浦よ人よさ

志をけりしとやけしよ城下今浦よ人よさ

志をけりしとやけしよ城下今浦よ人よさ
志をけりしとやけしよ城下今浦よ人よさ
志をけりしとやけしよ城下今浦よ人よさ

志をけりしとやけしよ城下今浦よ人よさ

志をけりしとやけしよ城下今浦よ人よさ
志をけりしとやけしよ城下今浦よ人よさ
志をけりしとやけしよ城下今浦よ人よさ

志をけりしとやけしよ城下今浦よ人よさ

志をけりしとやけしよ城下今浦よ人よさ

志をけりしとやけしよ城下今浦よ人よさ

志をけりしとやけしよ城下今浦よ人よさ

記さよしの後何をも其の大むねをわけてせしめよ
おをよせて志す一ゆりぬ君子の徳ら風をう小人
の徳ら業ありしと古徳のよしをいふこと
邦君此徳淳よゆ被せる此志す一墨あきその後と
きふとくそえゆりぬ

本山もとやま々勤九節々妻孝行の事跡

長岡郡本山々土居の町よ志す一とあよ孝行の女
何り商人勤九節とふもの妻よ一と同一村の
友き徳とふ農人のむとめあり勤九節々父を申さる

治志す一とあよ其の師範一とけねよを免りされ
よりさき治志す一申風をうぬい二年何やりをさす
身まうぬり勤九節々妻志す一のやまひをわたりし
て涼知のまことえ何り勤九節々母ら治志す一よりせよ
節をいしむやまひよかりまはしひまはらうのひあ
自由ふしをま身まうりて後いふ一とあやま一み
おきあ一とあまゆり何りす女事を強てよりひ七十
よ何まれま勤九節々何きあひのきめよ村室よゆき
りよひてたよ者よをふことすれあれとて其の妻
何れ一とあよはあ一若て録お一とあ記か一髪を

ゆい湯をひせお豆のさくひあ〜生菓をほ〜等
 子四人有りあまつ〜〜朝夕のうやむら〜あれと
 し〜〜〜お〜〜多〜〜おやのかりゆき〜
 志〜〜〜おのま〜あ〜てあ〜あを
 お〜〜人のもとあ〜食おあ〜をほれ〜
 さら〜〜あ〜あ外〜〜う〜の〜あし
 よ〜あ〜あ〜食〜あ〜あ〜あ〜あ
 腐をたき〜志海あ〜あ〜あ〜あ〜あ
 古を〜〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
 と〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

とちり四月の比人よあ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

中〜〜いふ際あれ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
 ず〜〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
 ほと〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
 めのや〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
 按の孝行を〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
 一感称年久〜享保十九甲寅の五月初本山御此
 大庄屋若回何〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
 お〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
 此恩命をか〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

土佐國鏡草卷之二

目錄

布作田村市松

商人重化

福田岩次吉村の民

雲嶽之村乃民

西地地村松之吉清妻并隣家乃守之吉清

押尾村之吉清

日下村孝婦

伊尾木村長之吉清

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, appearing as ghostly vertical columns of characters.

城下清八

大谷村清八

楠山村傳左衛門

中村商人治助

菱の川村左近衛尉女

上川口浦倉妻茂作

本山々大庄屋源田源々傳

城下平々傳妹合

土佐國鏡草卷之二

布師^{ぬの}田村^た市^し菴^あ孝^{かう}乃^のの事跡

土佐郡布師田村乃内石^{いし}剛^{ごう}村乃坂^{さか}新^{しん}谷^やといふ所
は市菴^{しあう}ゆきりあとの阿^ありをやく父^{ちち}はおくれいと市
菴^{あう}時より國士馬^ま浩^{こう}氏^しの僕^べ従^{じゆ}とありて年^{とし}久^{ひさ}し
くは之^{これ}よりあつある給^{たま}物^{もの}をと母^{はは}よをくりはふさ小^こ孝^{かう}
心をいせしをり其^{その}後^{のち}に浩^{こう}氏^しの^こを^あを^り別^{わか}れ^しに^ま没^{ぼつ}卒^{すつ}と
あり 邦^{くに}君^{みこ}乃^の國^{くに}圍^い乃^のは^はめ^めを^かく^し城^{しろ}府^ふ子^こ出^で
るこゝに^{こゝ}に^に納^なめ^めし^し今^{いま}の^のを^いて^まあ^まと^と母^{はは}よを^も免^{めん}ぬ

と一母乃命セざる事一何れを可れも食セとし
テ勤ヨ出ルヨ一在中はあ〜よひあ〜は免ぬ
れを其のまゝ母はかくとヤシて母乃心をやまんま
り
江戸よりていたよりこゝにありてあまやいあやを
せひ何るまき〜は乃命あ〜を贈りい〜か
をこまき事一あ一母よ〜い〜あまきぬるの〜あ
もあかき年より病よかりたあ居は〜よりあり
あ用乃をこひと心よま〜を市産市用の外は
とも母の側をたああ〜いあ〜い〜ひま〜
心を〜ぬ〜四十〜と〜あ〜

きりゆ〜あ〜御用よ〜出ル時〜母の〜
のり〜をうれひて〜あ〜
や〜母よはげ〜飲物食物茶のた〜ひ
と志願を用と〜あ〜一〜一〜
仍の〜隣家の志願夕又お〜一〜
九年甲寅の五月は村の長〜中例乃〜
あけ同〜八月末よあ〜を〜
あ〜

商人重作孝行乃事跡

高知城下の新市町乃商人は重作とよふあ〜

父を十善徳とし子重化婦は秦泉寺村の氏子嫁一
妹は何や一乃重は流之ぬ重化父母をや一あひて
孝心を流しやり父母とも小八十七年乃より心をま
りありか子孫乃より父はと一久一一病はぬ一て
たあら成し心よまうせむ重化母流りいせまう一一と
いともし人の孝順けをたのまもて夜合乃いせあみ
妻を納り乃流之重をかりをこせむ事あしく力
を流しやりされといせかもし人よもくれて孝順か
るより一をてし心あ一重化の姉妹を秘人こ
流よあ親乃流之ををせり重作四十を二ぬれと

甲子一妻を流しむ之を乃り力を流し一て母親の
心よあひ悦をゆたりま十善徳あや一享保十
九年甲寅乃四月よ身まかりぬ流事た重化父り
病中乃流之乃いと深切ある事よもおよひし
同一年の五月隣家よりけし一を中出八月の
末例のこ一一忠褒賞をト一納りぬ

福田岩次^{いんつき}と村の氏風俗よあ一き事跡

番員郡岩村々の内福田村岩次村とつらあらひの里
あり風俗よあ同よいさき一一流事乃家と垣壁

乃のすへをくはれてかきく正しく暮秋のす志きき
なりとも塵芥乃ふせき事ありあ村をもよ里光
ありてま真國用をほりきとり幸のよりあいの
まいきあありさう光乃月を乃をくせめをほり
松乃事いすれよもすえを家こよ農業織工此
ほく光をゆふりてかこよ其いさをををを事
男女ともふまこりてをこたをも耕收乃時も他
の村よりをやくいとも病はつひ又はは家事
ありて時よおくあもものをた程頼他人ともよ力
をあをせたまきけををりまを魚へ田代をむさる

りて分よ懸せぬこさをを互よ事め作りぬは孫
は孫あらしひうたなむはすりてかこひあは
いさこまりのこは事おき後よまをぬまのあはを村中
ありてまりて里きよはは家すもあく又はく孫いと
のて末を乃せ光をわむらあめを江府(中)活宗
のは(上)やも糶乃さこまりありて繩俵のうら
るるよりし念を入よのおほやゆあまいさかを
こまをいあむああり上のためよ力を考もるとい
もうりて思ふ心あり代の村は堀川除乃設ありて
出さ時を人よりさだよをのうけひの勤ををし

同一々の田は洋あるをばおの村のちちとらんおとし
ひてたきけけりも魚て國用の勤田畠のちちとらん
小心を用ひてたきけけりも魚て國用の勤田畠のちちとらん
むよもたけぬ魚一里きれを忘へしあ一地下人
のきる月ある風俗郡の法よりよきと法よりよきと
よをよひ享保十九年甲寅の九月よあ村の里を地
下人よ米を下一福りてあすれを買ふよ法より
傳りぬ

悪瀬あせ瀬村乃氏風俗一録一き事跡

懐多那画瀬村と田代とをくなく人敷多き里よて
法録よ山林よ入里薪をきり今浦よ持出よ一とけり
ひをきて世渡りよとさるふあり風俗あけよまな不
よ一々父子兄弟夫婦の百むつす一何ゆよよま
魚つる心あけきりよる日法と家人と一とけり
ひ朝か夕なめ志たけぬ欠ぬ法時とけりあよあより
たきけて互よ光陰を送り貸借の滞あけよとけり
時よの終よとけりぬる米よと利息をよとけり男
女よよあけあけとけりとけりとけりとけりとけり
あきとゆえよ年よとけりとけりとけりとけりとけり

ふも希もすあふるあーもー吉凶の事あれ
た族他人乃日いためあく男は悪き所程のたまけ
をちーまらーきもあゝあ居を捕へぬるうはく強ひ
ぬる何れを隣あそりともふ力をあをせていさうい
とふをちーまらーあてはくさりのはきもあの外
の運上あしこきさするをりいふく一回ー心はと
めたまあゝあかり申よも事たうて滞ぬるをを半
かぬあゆりえあつめ政あよ上細くて時おあ
乃せあをうけをは強くうつきへ何れあひをこの
まき志はうよあゝーきはまらあもはくしあ

さねと村の長あるものも年久ー々又あれすあれ
て風俗乃是あふと心は強きよのは強りく
さあも一回ー事あゝめと思ひるもーあよ享保
十九年甲寅の九月郡のはりより村長里老また
は強きてくくくえ上ををけ来れとさくを村の長
地卜人ともよトー納りて巻を國内は強く納りぬ

西野地村森之屋り妻子并隣家のウを信奇
特の事跡

長岡郡西野地村は森之屋信奇といふる民ありは

をばやといひ娘を縁としりききと云はさうしやうする
産業ありてはつる日このの母波りをあせりあは
三年以来心くはりきき病をうけて廢人となれり
妻娘とも小病に病ははりておこしは半あきき
乃妻の飢饉よきうたけきぬふ子及奥あきき
うかうりたけひて病人乃やあひとやりはれとす
たる程のたよりをあげきき母子とも小隣阿そり乃
あまたあ入しそ衣類を阿ひききれたあぬふるを
はし先作りぬかふ業をしたるるかあなれと隣家
の者ともしそ業を母子乃志深切小実やうなるをあ

をききて阿り阿り食物をを阿ひききてあ
かもしり心ありかふ時は母子ともあはれと縁を
中おいたきききりれは先程阿りの方とてとて
かよは阿ひぬれをけおをはききき入りやけいきき
身としておぬい様の物をはききと縁は入きき
わり病人は阿りてあきき先収む近年うち
はきき縮阿り衣服乃りやあききと帝山なれと
志と云はる妻は城下のうちれよて農業の助とある
半ありやれと人の志憐よて先陰を送り母子
とも小病ふかりぬるなりと阿れとやりははあ

あやむを志のきて病人乃くわう小心を用きとふ
るあり—母子とも日の内いくきひもし出入は盡き
よこしをけあくさむゆりききあよまをんる親
類よまを種てめつとく糸命せけりこし—和
ふ初も志願ある思ひやゆ魚—志を清り溝あるよ
字を清とく不農人何りまことよりこしたるなり乃
身よハ何れ種とくまればきまをわ不実ある者小
てお乃り比のそよ志を清り家名を挿させ病苦をい
たり志を清り妻子乃外へゆきぬるひまは字を清
り家名の者志を清りをたきけて親類乃こし—心を

清くして年月ゆれと露をとりとくといふまを
—享保十九年甲寅の九月隣家の者とも村
のあよや出例のまこと—志をきけ回—年暮月
の末よ志を清り妻娘字を清りゆれ—よま月を
下—物り應貴の恩命を蒙りゆりぬ

押園村忠史の志清り事跡

志清郡押園村よ小笠原何り—乃知り不阿もあ
氏を免た聖つとく不持れり徳弟の従者を志清とく
り人ともあり何れ—実様よ主人よ清之てきめ—

をくちきりおられ何り覚た進み家すら———嫡子
九尾を其の八尾年よりありて江戸の住とめよゆき七とせ八
とせをるぬ覚た進み二男覚助六尾と農業者をいと
あしぬきしと覚た進みの住とめ耕種のこととせ
よも家事何き守覚助も進みきりゆきよ六尾心
よかきしと進みの時をたりすと覚助をたすけとあひ
きさきよ———世渡りの事———船よをり起て田
畠乃よくちを又はくろむせ持の身ハ覚助を右よ
あ———船よのころおよ入ちと力をはく———おこし
半あり———されとちや覚た進みの住とめ給主へ果穀

のち———ひ滞ありおひめのせめ法もゆか———九尾進
江戸より入りて六尾進よお進乃進をりし妻子を
も———お進んと幾後りもむねも六尾進ひたさ
いあし進よ進をりて久———きよ———このやはくれあ妻
子をもちて今までの志の薄くありとせし本進か
らぬりありしといひてうきかきも九尾進つと持乃せあ
あ進志をいし進とせめてハ進乃進乃進進をふし
き———おん———をいし六尾進つと礼をの———思進い
き———進進由りて目を揮る乃後九尾進つと進———て
代ハ進をり———進進の進をちる———よの進進乃農

人とありまうりあんりあふり海よりと涼く
ふよりとまき法恩あれをお回せよ海の中へ魚を
よ〜とまきぬまき九言あまもよ海こひて主候の
まらぬをたあれ回幸乃農人とあ〜ぬ六言字
ふ阿より妻もあ〜播身よて田代山林をひらきたま
り乃貢物ごり後つれ乃兼もも人よりしきよ日記
まて滞りかくるあ〜覚た妻甥たき海よりあまの
後まよ甚化と〜るら六言海うい〜とあり六言海死後
ハ甚化よ家を継ぎと魚き〜一は縁〜人よもわたり
甚化も時半〜をうけひ侍りぬを志日うが二飛〜主

人の手をたあれぬれと播身の後ま乃名ハ世よま
れ〜ゆあれを妻も阿りて後ま〜や家ゆた〜ふ
りて子孫あるも乃建永の恩をひきま〜も覚た妻つ
家よ對〜てまらあま〜らまの阿りもせとあよ
阿よりて死おた〜も〜るあ〜と〜か〜〜思ひはめ
ぬ海と又〜まの甚化を若子よせ〜る〜り〜も〜も
心をたあり知魚〜六言海〜身農業よお〜ま〜りあ〜
覚た妻つら家を出て二十歳を極ぬれ〜も奇持乃乃
村中隣の里す〜か〜れあ〜享保十九年甲寅乃
粟月末よ隣あ〜り村の長よ中例の〜〜とまき

とけ回二十年乙卯五月乃初に孫を納りて養
福の命を蒙り侍りぬ

日下村孝女伝切ある事跡

高尾郡日下村より氏乃新化といふもの有り此因
甲人乃内を人の娘として四年あり外は是之に新化の
母八十より六あり其年あり四つに乃目は是れて
又一女のこの新化を捨つてよりめひとあり新化
り妻を化といふ志ありは之て孝心ぬく阿つさ
室のいさなりありさかたおこたる事あり飲みの

養子のとてあり一歳後ともいひてむいありそ
上夫乃をひきたるぬはけてをさか子をたぐ
むこゝろ力をほくせり新化病を得るはあよ本井
何りり後夫とあり富村よて山莊陸田あるのを
あしてをさかたあり一とめひとありて後にはま
り一日きりのをたぐきふてはつり小光陰を送り侍りぬ
又甲人このよを志を阿られ主人をりよははりて
をら一はく乃をさかたをせり享保十年乙卯三月
中比隣家の者をも中出例乃こゝろ上をと
け回一年五月初より月を下り納り

不肖のれを遠道よりとせり

いをき

伊尾木村農丈長之傳孝行の事跡

安藝郡伊尾木村に長之傳と云ふ農丈有り父を
五之傳と云ふ時々村の長は之より勤を
かして世を渡り傳りては之をめでて長之傳
小若れより心切たふき七十お阿まりぬ長之傳生れ
は孝行實儀は柔和なふものとして孝行乃志深き妻
もおあり心は傳を伝へては長之傳をたをけをこも
るおこたふも物な夕な心を伝けては孝行ありあはれ

寒暑乃あやましくも父の心は我むくを人小
まぐれて深切あれを小や五之傳もは傳は長之傳
丈ぬり何はしれもこ流あふ若くはひき乃男を
心あはれしぬ傳と人あも傳りて伝へて志の
あはれ長之傳と云ふの田代を傳り置敷とも小農
業をたふすも急おさむ傳乃時をおこきもをこ
はきお地より乃公役をうけしもうあかへをうけ
て人より先よこきも人ぬあめ八人あれともたを
けをたふすものありおの一人の伝をたふして果こ
のこたふをりしおあはれの由恩をうけては

きさう急中と云くも先陰を送れり享保二十年乙卯正月下旬村の長隣とあり申出候事實を云上り同一年五月末より多目を得りり應賞をかりむらり例のこと

城下澹八津切ある事跡

言知城下のうまれは澹八といふ者あり邦の守小治之て定り乃後卒乃教は共らりてとひきき家士乃分限を治とて後役人の下よつめぬ人となり實根またりあり候者あり兄

貞平といふもの同後卒とありて五六年あはりまうりぬれと治之乃年教のうき治ゆゑは家治傳りぬ澹八を討より兄を歎は遠き治いし事あり者とをもをあると云はる秘に治は若くしていふかとお治候あるもの志のこあるを阿保を云ふくくくありせよよいもかかぬき近き年より病よかりぬれと病のいよまよはさる心をはくしそいきりり治切あるを云ふも治くかして家治はくく治夕のいよも心よさうせぬありしともいひらむあるよりいひ五十は阿保りぬれと

あやもむくきとやうくもむむる人阿れと好の
うややくの昔ひ乃ゆたらあし福をかふる此思ひ
よりもあしとてら幸の事を内申の事一よりあひ
とりとあて人少むむ心もあし上よはうておこ
らすいとまよをまごの細工やうの事をあしと
たをげとせとさぬをしえ人こもよ年一くあ
ぬさ乃せらあるを感し思ひて享保廿年乙卯因
二月末は役ふ乃下はうさより路あふ人よ中上よを
隣阿きをもの人よとひすせふよはうかひりあして
同年五月末く切米を納りり鷹賞乃恩命を

蒙り侍りぬ

大谷村農史清八孝行乃事跡

香美郡大谷村は清八といふ農史阿り親ははうて
孝あり父乃よりひ八十よせよりも是もくふり阿つ志
まゆぬ母七娘よ四あり志もゆひとあぬりあ
親ともふをはらひて立居心よ中よりせを清八家ま
つしきのさう進き業乃せを阿しきゆ志は田畠を
もうりさしひ六年あより母没すのたつきあして
史婦とも小人乃従者とあり一人乃子を男あふ

とのよ阿の事おき妻ハ峰下よゆきを身ハ回一村よ
有りて是ハ主人のよと小作と免扱こふ高よ有り
父母乃き免小阿希乃日の飲との喰もの中々も
いとあすめてあくさ免異さるまきををいきり
て衣扱あとも又苦一かぬ程よその阿くひす
きよ力をはくく一露をくりもいひむまあ一
父母も清ハうや流く一きを阿られよおのひを流く
の程と一露あるを収ひをりよ婦れてハ人も阿りぬ
隣あより乃志ぬ者年久一々を孝行乃流と免
人とありのあつ一誠あるふめて享保二十年乙卯

三月は例のこく一ヤツて五月末よ多目を下一
有り有りぬ

楠山村間氏傳右進の孝行乃事跡

楠多郡下山^{志しやま}楠山村^{くすやま}乃間氏傳右進といふよの父
母よ流りて孝心を流くやり父を源六といふよ七
十小おより年久一山林のまりを流と免有り
一よ七八年たあはさまよひの田代をりあを傳爲
よゆ流りて下山の田代とよふよ志り其地山
ちこをひらき流りて老を告りたれとまられてま

く登りあふむすれはきゆ急山林のもりをば焚めま
前ぬ享保十八年の暮小いきより源六母とたりの心小ま
くせも髪を焚り乞食小出る事さすし志きつらふしきま
記作りしを徳右衛門と聲あふもの此處へ思ひと
中ふ魚きさすしをさすやしぬれとしさうりま入ふ美
あし徳右衛門ぬうくまきひて妹聲の心はけまき
くひ今まで経ふ屋しきひ之地を父小のくしこり
ハ父りあふようつり位て露をかり垢ををむんあし
私よせしころを之ふるうあふ心小やし村のあふり
よりをたつ子作りしは親子のるむすしぬる

てあきさすのほひぬるゆ急あふきもんでうしとも
中出さふしをこき入ぬ親子の産業入かりよ損益
此たりひをさししと思はしる事し人感心せさふなし
源六うむすれはきささくしあしあしあし
としし徳右衛門は福く父のしあしを云業よ
出せふしを隣あふり乃人も守およりさうしゆ急に
徳右衛門も父も同一心のあふめしおもひ作りし
小このきさひのゆよはきさすしあて徳右衛門り至孝あふ
をさすやしぬ源六う妻と心ひらきしきさうし徳右衛門
をぬしはらしあひしあてまし同し徳右衛門

おくり物用途ありとをうけしりけしきとす
詠ありしりお給より著よしきり何れも何れも
目まじもさきよしよしとさききたてしめ玉んる
を祓くひぬるをかりありしりお給れをらしりお給
ひ侍らさるしりこのよしを知らふ人こと何れも父
母の泣れおきし我やんしりお給ひあんとしり
侍らあすてお親乃之業お子とも乃之業しりお給
へおれかしりあふしりあしりすの事しりお給
侍りぬ涙六山林のさりを泣とめ村あるのかりとの
あやしゆふしりを豊なりしりお給し侍らあしり入か

りの時しりしりおの泣とめ乃蔭よてあんと村
あしりかりおをゆきしりお給し侍れを泣よ
泣とめしり年よ四拾又泣しりお給し乃料銀抄百
をえしりしり方しり泣くのひ中魚きしりしり侍ら
う幸ありひぬされしりお給し侍りゆきふしりお給
けをふしりしりお給し侍り泣くのひ侍りぬを
て侍らあしりお親お泣しりお給し侍り年歳ま
れ竹のあかりお給しりお給し侍りしりお給し侍り
しりしりしりお給し侍りしりお給し侍りしりお給し侍り

〜徳右衛門八人よもくれて孝行をほく〜侍るよ
〜村の長隣家の人も中はた〜縁こひの長を
何〜り享保十九年甲寅の秋八月村の長より
那のほろよよ〜を中出回二十年乙卯秋九月
彼地あるひは隣村の里長農吏を城府よ〜て其
孝心乃実をほろ〜り〜侍るきをまひ〜
〜をとり種子月初よ弟を福りて歴農吏
の恩命をい〜き侍りぬ

中村商人治助孝行の事跡

懐多郡中村の下町よ小商人の治助とり〜の侍り
父を暫平とらふ〜を〜の品を賣買〜て
家内五六人乃母後りと〜は享保十二年戊申
乃大災よあひて〜あり〜く朝夕の煙たえま
〜あれ〜父子とも茶壺乃き〜ひをかり〜の
〜あひて村里よゆき〜〜ておの〜を
て〜りよ一日を〜侍りぬ暫平五年す〜り
やまひよ〜り〜の〜〜
婦〜てある用乃おく〜たあ〜も心よま〜り〜治助
父よ〜て孝の及をほ〜り治助り母も〜

てきふ何小実を伴ふものよてまははてしてさうも
うまはる向くあはくまう病れたもきをいさかりを
りき乃子ともれさハリ一絶をさ家向く一いかり
乃向よりあ一絶あ夕な飲物らひお乃との一きさ
暑さの危向つひ衣類のあひきききすていさうも
人ふかきと向くさすやうのさる一治助は縁一
商業小出はなごころよ父をあくは丸食事一福おこ
一のたきけを母よあつたのき重幾のは時ら
家土産やてさう一のあをさのて父よまめ母を
いさかりいさあきさきをめく母とさよ力をはくし

父のくむりう小心を用ひてしりふことあ一享保元年
し卯の春智乎あまかりぬやるとたさた乃る人乃力
をわき治助らういさあきさきすておこたり
あ一治縁一町あまのさゆかりおやていさ
こ初りかき乃せ免をうけき十二歳より商業を
す一め今年廿一歳ありぬはまの丙丑年この
うさ内乃をさくさあよなはけてさ一何一此か
りは姉一もすへまか海原切乃行町の長きこと
け同一年二月郡乃はさよはけ秋八月障家
此者あひ小町の長を城下よめ一を實をたし

とひ例のごとくち上をうけ冬十月初多目を納り
て應長貴の恩命をうけ作りぬ

後の川村農丈左近衛の女孝行の事跡

播多郡下山左衛門の川村小親小治之て孝を以て
て女有り名を感とり父ハ左近衛として農
丈あり左近衛の八重さまより重き病をうけ床よぬせ
り感よふひ病ををぬれも治之ておこたふ冬
ハ夜臥をうらうらきあつめてまといぬすられ
て重き時ハ父の重きをうらふれてあつめ及ハ蚊

をちひ麻をあふきて何つきを志のりむ食事
をうらひ保つゆハよ心よりかゝるふくを個へさう
は竹乃筒やうのおふれて父の左近衛よ至てまぬ
らふ公をよ保つ時あれとおのまじかゝるにて食を
保事かゝる父の心を何りまじかゝるを挙げぬれ
をぬれをえて母兄弟と同一く食を快くせり
父酒をこのま生魚あけまじかゝるをぬらるゝ感
動よ父の重きをうらひおたゝく又ゆきを村
より出保起炭を岩間村といふ所へ持たこひて向き
ひをとりて酒肴をうらひりてまじかゝる二里半を

かりの及のりあれともきこえをう〜ともおもひ
阿も物よ行て登より内よ仰りぬ阿も時ら生魚
あきをうれひて追き阿もりの川よゆきて蝦鯉の
たくひをさうり求むをさす甚〜く水とちてんふ
さきさま〜き時をもい〜と水よゆりてはいほも
得ものあるゆきよ孝心の志向〜あ〜めと又人こ
と小奇矣乃思ひをあらけけ〜父の傍よ阿りて
病のよ〜阿〜をうかひ世の中よ縁あ〜〜た
のき〜き〜をかり阿やふれ病よかり〜人の
〜強〜も〜や〜愈〜ため〜をむき〜父の心

をあら〜さ〜阿阿ち聖心の芽花をうりて寢席乃
造よ至葉人形をけけ〜いを憐〜た〜た
をさあき子をうひむ〜き〜感よ〜サよ
九阿よりぬき〜父の病えを〜〜や〜
た〜〜縁法事〜の〜むきひを〜〜うけかり
妹八人の妻とあねり左近衛つ若子其は勅宣子伊帝
末の女らねも心まゐらふ父母よけ〜て〜
兄弟のむつ〜〜年月ぬれと流風の立よし
もきこえ〜左近衛つら妻もまよけ〜て切よ心をけ
〜やり左近衛つも父母よ孝行の志あり〜〜

いふにめと感の奇物のほくゆきよ父の美名をいし
也一傳りぬ享保廿年乙卯七月村の長ははきよ
平中実を志す一郡の司中一回一九月例よま
りて村長里氏よたし問ひ上をとけ冬十月初
米を納りて感の志のを慶賀せさせり

上川口浦倉を茂作孝の事跡

幡多郡上川口浦は茂化とふもの有りはては平
とあり定りのかきふはあり浦浦穀倉乃守を治と
むいともあき時よりあねふはて孝のきこえ

有り父を佐五右衛門とて年々一穀倉乃守を
治とた傳り一は茂化十二の歳の二歳より父の苦
勞をいさかりとてあねとあね倉此邊をえはく
ろひをいさかりとてあねとあね倉此邊をえはく
ひ志あす十七八歳のあり一は父ふかりて勤を志
ひせりた五右衛門よりひかりてあねとあね倉此邊
けては茂はあやり茂化傳の心を治く一は物ふひ物
のいさかりとあねとあねの有りひはひをいさかり
まは母よもまよりせきとあねとあねとあねとあね
いさかりとあねとあねとあねとあねとあねとあねと

ひてちりーを奉と彰かこちもやせおころい侍りぬ
左五右馬七年前より身よかりしは茂化婦くつかし
めりかりし後ハ母小治くていふく孝を流くし
母の重き病よかりし時ハ茂化夫婦ふりくし
きゆ急よちかぬありぬ病中小隣りくらの心を
よや一人は禮をのふふことまされて深切あり享
保廿年乙卯十月村の長茂化く年月の事跡を志
海一郡乃司よ中例よまうせ云とをとけ回せし
享保丙辰二月小治を納りて應承貴乃中恩を蒙
り侍りし

中山ハ大庄屋海田源三流家物の事跡

長岡郡中山ハ乃大庄監を海田源三流とてり
人となりありつゝまこととて慈悲乃心深し享保二
十年乙卯乃妻二月乃ちりめり同一年秋乃
比まて中山ハ乃村ハ疫癘小かり申し下関村
の民家まてれて甚しき里老あるもの子二人
とまてまてちやめり山ぬき里乃ちりて疫
癘疫癘あるまていとおれれ族他人とて小
ゆきこひまてりあきれれ物夕乃いちまて茶や

う乃事やましも半ううそのふ乃をたら侍りぬ
さねと源吾流ハ曰くふ村々をめぐり病のよ
あーをいひ米藪乃たまけをあー星老り家
のまらーきをすふ二人の病者よ食お乃めつじ
きを給てあはくいきりそらよ源吾流父子五
六年さねよまきくはつひー時用おー人參乃あ
まりを星老り子よ何こてそ何きひきくぬのこい
さく此禮物をいそ幸侍き村中乃きあふか
ら費用をとりてまき祈禱をいきー札守を病
はまのあよまらぬ志う乃あきと耕種乃時ふ

ねも病をうけて田代をあしぬをけ源吾流よ
り村中乃民女童小いそふまて病をまぬかれー
者をよひ出しておこらあく農乃業をたまけ
はと先志むそ外あし乃心はくい源切乃初と
と源よもはくーかー享保廿一年丙辰乃正
月中旬下関村の星長村老とも源吾流り地下を
めぐすふ侍家ーを郡乃下司小治事次序を
経て 源聞よ入連たてまら同年二月下旬
源吾流小采をめぐりて徳義の 源恩をいた
き侍りぬ

城下間民平を誘う妹合う事跡

予知城下の新町は間民の平を誘うとふこし乃阿り
父を八右衛門とふ妹を合とふり平を誘うとふこし乃阿り
此之て彼平とあり工作の流うさのしは流とめ侍り
しり人とありまゝやうあるは新よ流るるの彼
をお母を流を申られ江戸乃郎は流うよひやとふ
享保八年癸卯のしり眼の病よかり我のめする年
盲て流之をやめ間民との連り母よはたをやくおくれ父
八右衛門は享保十五年小病よかり弟よかりぬ合うむ

それ流すともあはよ実阿りて福もこ流は阿流くいと
弟あき時より父母よ流之て孝を流くしり兄をいき
り家申乃流之をあしり流乃給物をもちて父
と兄乃たをいけをあせり父弟よかりし時と後乃
あよられと合つしあこよと細ひ侍りぬうりし
後ハ平を流ひとり弟よたのむ不あくや流く
しり眼乃及ぬものかし人乃きあは隣あこり
のしり平を流うひ様のりからてハ光陰をたよりぬ
魚きたつきもあし合ぬうくなききて己の弟を
惜やもくしりし二十をさぬまこと兄乃弟をさるお

とひて夫をとり乃心あまを主なる人のありぬ
てや平多流りたまげともなりぬきこのよめあ
せ流りぬれとせられきこの節なきことあ
りて夫婦同一心よおもひあふ申乃急よをを
てすこと申小流と先をあせり流れし者あ
てあつさなきをこひ流しきおをほゆるあは
たしく道て足よあし隣りその人よ又たをたの
み大災よかりし時をををこりて兄をさ
さめ夜敷のたしくひまををえん苦しめてぬ様小い
と兄の片端ある身よ人乃為ふ力を用ぬる

をいふあそめて流れありもいひうむをか
か一年月の流切ある前を隣りきり乃又人
同一心よぬれ感し元文元年丙辰乃三月下旬
流りし小申例乃こしと上をとげ回
年四月下旬小流を流りて歴々貴乃
御恩を夢り侍りぬ

2

1



